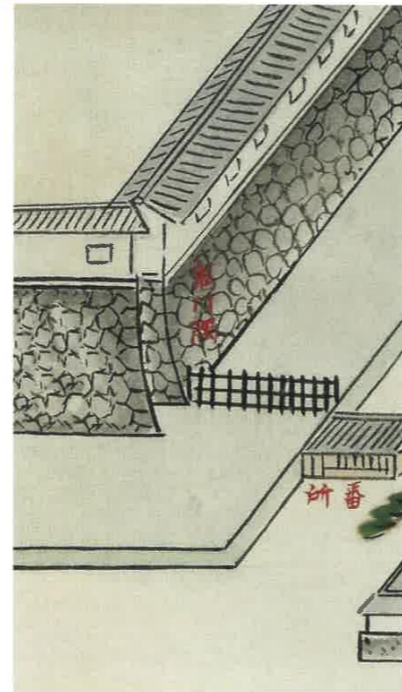


最大の特徴 隅欠（すみおとし）



16 H002～H005面 隅欠

北東の隅部は、鬼（災いなど）が入り出す方角です。そのため、石垣の出隅を欠いて入隅とし、鬼（災いなど）が入ってこないようにしていたと考えられます。



天保年間鹿児島城下町絵図（玉里島津家資料）（部分）

天保年間城下町絵図では、隅欠の部分に「鬼門隅」と書かれています。

《西南戦争の砲弾・銃弾痕が残る石垣》



17 H012面 西南戦争の砲弾痕・銃弾痕が残る石垣

御楼門周辺の石垣には、無数のくぼみが見られます。発掘調査の結果、これらのくぼみの多くは、明治10年（1877）の西南戦争の際に砲弾や銃弾を受けた痕跡（砲弾痕・銃弾痕）であることがわかりました。今でもくぼみの中には撃ち込まれた砲弾の破片が残っているものもあります。

また、一部には第二次世界大戦の銃撃の痕跡があることもわかっています。この石垣は、2度の戦争を経験した全国でも数少ない貴重な石垣であり、戦争の悲惨さを今に伝えてくれます。

他にも、本来の位置から城山側に動かされていますが、黎明館北側の私学校跡（江戸時代は御厩、現在の鹿児島医療センター）の石垣にも、西南戦争の際の砲弾痕・銃弾痕が多く残っています。



18 発掘調査で確認された砲弾の破片



19 私学校跡石垣



20 私学校跡石垣の銃弾痕砲弾痕

鹿児島城跡石垣ガイド



鹿児島城跡は、慶長6年（1601）頃から初代薩摩藩主島津家久によって造られ、江戸時代を通じて薩摩藩の政治・文化の中心でした。城山の山城部分とその麓に広がる屋形部分からなる城で、その範囲は、城山～当時の海岸線（現在のみなと大通り）までと広く、総面積は約85ha（東京ドーム約18個分）もありました。山城部分である城山が、鶴が羽を広げたように見えたことから、明治時代以降は鶴丸城の名称で親しまれています。令和5年3月には、本丸跡を中心とした一部が国史跡に指定されました。

《御楼門周辺石垣の注目ポイント》



1 H013面 江戸切り

石垣出隅部分の稜線を一定の幅で削り、稜線を美しく見せています（積上げ後の施工）。



2 H013面 金場取り残し積み・目地漆喰

石垣表面の縁取りだけが一段彫り窪められています。多角形の石材が、隙間なく積み重ねられていて、目地には漆喰が施され、見せることを意識しています。



3 H011面 亀甲崩し積み

多角形の石材が、隙間なく積み重ねられていて、目地には漆喰が施され、見せることを意識しています。



4 H017面 刻印

鹿児島城跡の石垣に残る数少ない刻印です。他にもあるか探してみましょ。



5 H012面 多彩な加工痕

御楼門周辺は、様々な加工痕が残されています。石垣出隅部の天端付近が反り返っています。見せることを意識した意匠と考えられます。



6 H009面 キオイ

石垣出隅部の天端付近が反り返っています。琉球のグスク石垣に見られる技法です。

令和6年2月発行

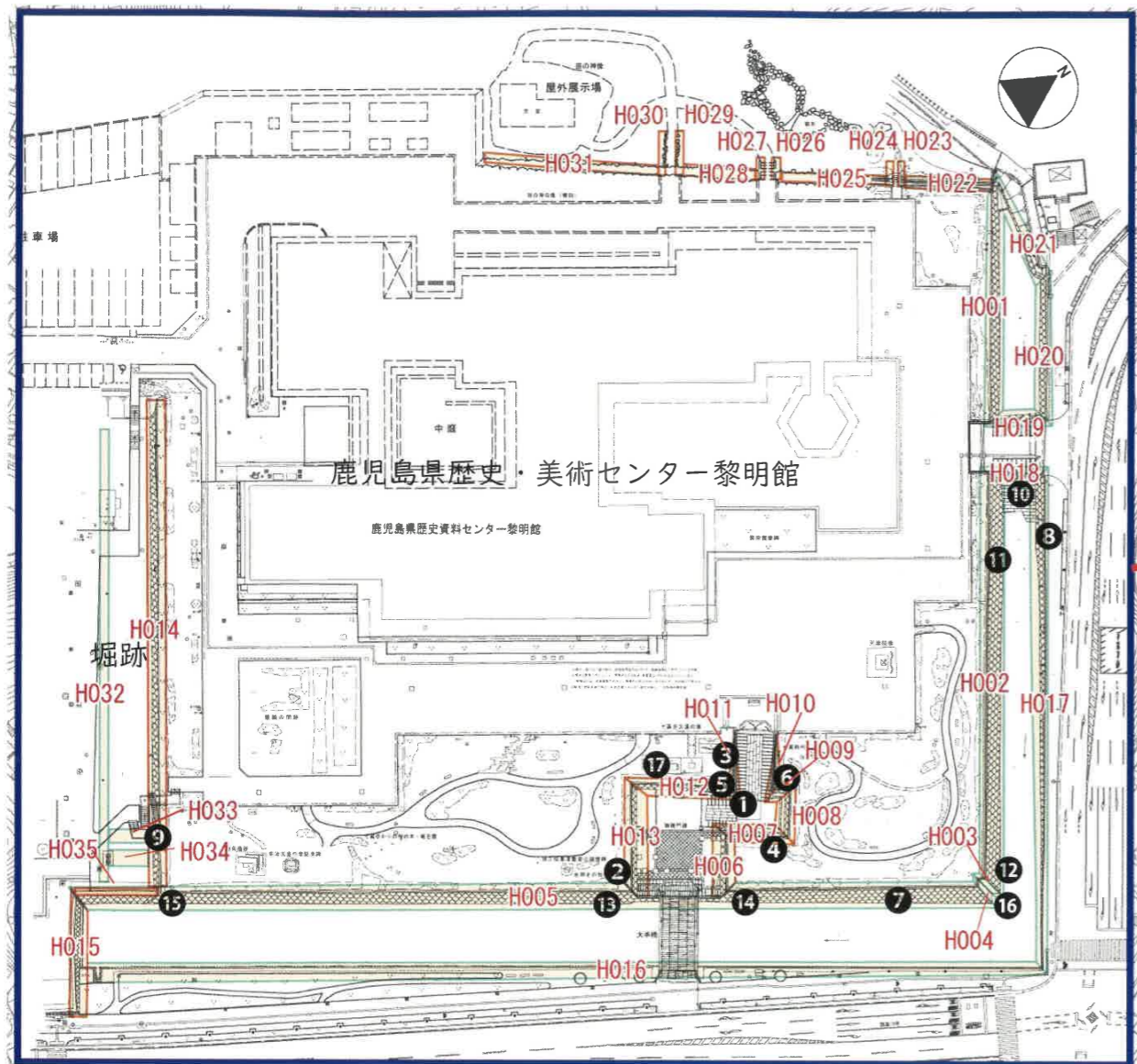
鹿児島県歴史・美術センター黎明館

〒892-0853 鹿児島市城山町7番2号

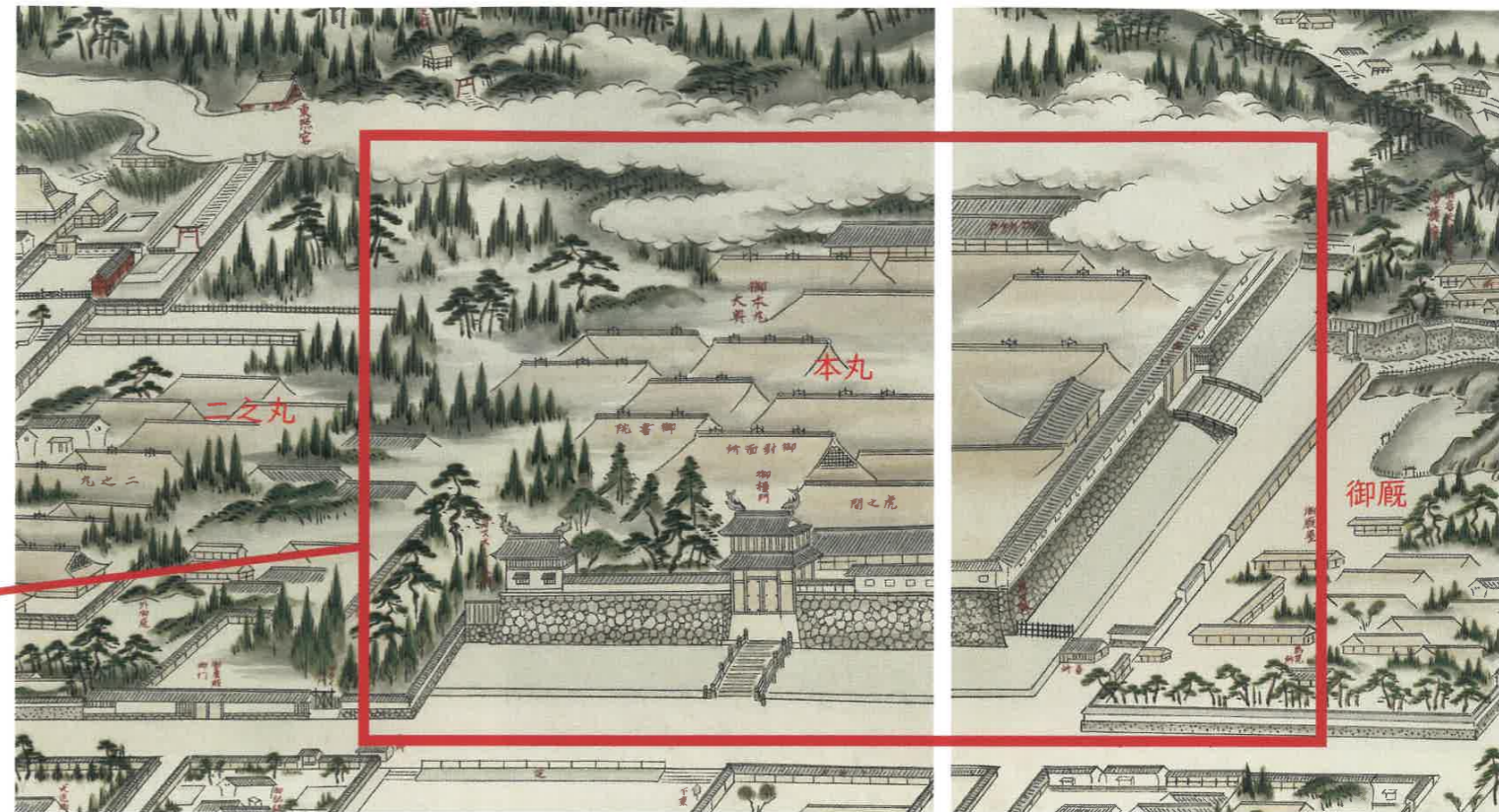
☎099-222-5100 FAX 099-222-5143



<https://www.pref.kagoshima.jp/reimeikan/>



鹿児島城石垣めぐりマップ



鹿児島城下町絵図屏風（玉里島津家資料）（部分・一部改変）

《石垣鑑賞の注目ポイント》

鹿児島城跡には、石垣をもつ武家屋敷が多く立ち並んでいました。それらの石垣は、明治10年（1877）の西南戦争や大正3年（1914）の桜島大噴火に伴う地震、第二次世界大戦等を通してほとんどが失われました。現在は、鹿児島県歴史・美術センター黎明館がある本丸跡や鹿児島県立図書館がある二之丸跡、鹿児島医療センターがある御厩跡しか残っていません。本丸跡の石垣も築城当時の姿ではなく、これまで何度も修復されたことがわかっています。今現在残った石垣は、それらの戦乱や災害を乗り越えた石垣なのです。そのため、同じように見える石垣ですが、同じ面でも様々な積み方をみることができます。

《鹿児島城跡の石垣の石材は？》

鹿児島城跡の石垣の石材は、火砕流堆積物である溶結凝灰岩です。加工がしやすい石材で、灰色をしているのが特徴です。火山が多い鹿児島ならではの石といえます。鹿児島城跡の石垣は、その中でも、約50万年前の吉野火砕流の堆積物である反田土石が使われています。



⑩H018面 土橋の石垣

北御門前の土橋の石垣。石材を加工した切石を横方向を指向して積む布崩し積み。石材は小型。



⑪H002面 西側の石垣

正方形の石材を加工した切石を、隙間なく横方向に積む布積み。石材は小型。



⑫H002面 東隅の石垣

形や大きさの不揃いな割石を、不規則に積んだ石積み。鹿児島城跡で最も古い石垣。



⑬H005面 御楼門南側の石垣

やや加工が荒い割石を横方向に積む布積み。石垣と石垣の間に隙間があり、間詰石がみられる。



⑭H005面 御楼門北側の石垣

加工した切石を隙間なく積む。積み方は、横方向を指向した布崩し積み。落とし積み。



⑮H005面 本丸・二之丸境の石垣

まず本丸の石垣を造り、その上に二之丸の石垣を合わせている。



⑦H005面 鏡石

H004面やH005面では、大型の鏡石と考えられる石が石垣の中ほどに見られることがあります。他よりも大型の石材を用いる鏡石は、権威の象徴や経済力の誇示などのために、虎口や本丸天守台など目立つ場所にあることが多いのですが、鹿児島城跡の場合は、石垣の途中にあります。もともと御楼門付近にあったものを、修復の際に今の場所に移されたのかもしれませんが。こうしたことを頼りに、石垣の修復の履歴などを推定しています。



⑧H017面 令和2年に修復された石垣

H017面の石垣の一部は、平成27年に大雨により崩れました。令和2年には、その修復工事を行いました。修復に伴う発掘調査では、崩れた箇所を挟んで石垣の積み方が異なっていることが確認されています。左側は細長い石材を斜めに積む谷積み、右側は、正方形に近い石材を横方向に積む布積みです。布積みの石垣は江戸時代のものでしたが、谷積みの石垣は、昭和2年に通った鹿児島電気軌道（現在の鹿児島市電）上町線の車両を通すために、もともと階段だった石垣をスロープにするために積まれた石垣であると考えられます。



⑨H014面 地下から現れた堀石垣

H014面の石垣前面の状況を確認するために、行われた発掘調査では、現在の地面より約2m下まで石垣が続いていることがわかりました。地中に埋まっていた石垣は、本丸と二之丸の間の堀の石垣です。発掘調査では、堀の水を堰き止めるための井堰遺構が確認されました。通常であれば、堀の水を堰き止める必要はないことから、この堀は、堀としての役割だけではなく、幕末には島津斉彬が造ったとされる水練場として利用されたのではないかと考えられています。